第四章　男児の志

当時の人々は、耳を疑っただろう。

長州藩三十七万石を相手に戦った幕府軍が負けた。慶応二年六月のことである。

正道たちは、京都の文武場学問師範、内藤七太郎宅へ寄寓しており、そこで敗報に接した。

戦意に欠ける幕府軍は連戦連敗、老中小笠原長行が北九州の小倉城を放棄するに及んで趨勢は決したという。

長州征伐に駆り出された各藩は、内実どこも財政が火の車だった。幕府の命に従って出兵し、今でいうところの多国籍軍を編成して戦ったものの、将士の厭戦気分は如何ともしがたい。一方で、長州藩の方は国の存亡をかけた戦いであったから、四民競うて奉公の誠意を発揮せり、という総力戦体制で挑んだのである。奇兵隊をはじめとする諸隊は洋式銃で武装されており、婦女子から老人まで採薪汲水の労だも厭わず、防長二州に地鳴りの響くがごとく戦意が高揚していた。

「完敗だったらしい」

と言った内藤七太郎の顔も蒼白していたが、それを聞いた正道は卒倒せんばかりに驚愕したあげく、その場にへたり込んでしまい、晩には微熱を出して寝込んでしまった。

常盤之助は常次郎を伴って三条大橋の方へ向かう。落ち延びて来る幕軍兵士から前線の情報を収集したかったからだ。

久しく安穏無事であった神州の王城も、開国と攘夷、勤王と佐幕という思潮がせめぎ合う修羅場と化して久しい。元治元年には禁裏の争奪をかけて長幕の武力衝突が勃発し、兵火にかかった市中は三日間燃え続け、二万八千余の家屋が焼失したという。常盤之助が見た京師は未だ復興の途上にある。

癸丑以来、各藩はこぞって洛外に藩邸を増設した。政局の中心が江戸から都に移行したからであり、非常時に備えて兵を常駐させておくためでもあった。そのような動向も含め

て建築ラッシュの活況を呈している。新設されたばかりの藩邸から長州へ出陣した各藩兵が、一敗地にまみれて続々と引き揚げて来ている。

旗、幟、具足まで赤で統一されているのは井伊家の部隊であろう。かつては赤備えと恐れられた徳川家の先鋒も、長州の民兵に追い返されてきたようである。包帯を巻いた負傷兵が列をなし、騎兵の陣羽織や筒袖も戦塵にまみれている。

常盤之助はすれ違う歩卒に声をかけ、一分金と引き換えに戦闘のあらましを聞き込んだ。

どの兵も、ようやく脱したばかりの戦場のことなど思い出したくもない、という表情になる。

「長州の連中は、猿みたいにあちこち駆け回って鉄砲を射かけてきた。山という山、嶺という嶺にヤツらがいて、まったくなすすべもなかった」と皆が口をそろえたように同じことを言うのである。

確かに、負傷者はすべて鉄砲傷を負っている。刀傷や槍傷は皆無であった。

火力の差が勝敗を決したのは間違いない。撤退してくる兵たちの中には戦国絵巻の中から出てきたような鎧甲冑姿の武者もいたが、長州の兵は筒袖に段袋という軽装で、陣形を組まずに散開し、地に臥せ、あるいは物陰から発砲してくるという。これは従来の兵法とはまったく違う戦い方であり、欧米から輸入した近代戦術というものであるらしい。

それにしても、戦場で討ち死にすべき武士たちが、生に恋々と逃げ帰ってくる様を見て、常盤之助は得も言われぬ失望を禁じえなかった。常次郎などは声を震わせ、

「なんと無様なことか」悔し涙をにじませた。

道端には途中で打ち捨てられたとおぼしき具足や、陣太鼓、法螺貝まで転がっている。

実はこの時、幕閣は隠密にしていたが、大阪城まで遠征していた十四代将軍徳川家茂が薨去していたのである。死因は衝心性脚気と伝わるが、くわしいことはわからない。享年二十一という若さだった。

八月になってようやく将軍の死を発喪し、翌日には征長中止の勅命が出されている。次期将軍となる徳川慶喜が全軍を撤退させるのは翌月のことだ。

その間、在京の幕臣たちの動揺は切実で、内藤に面会を求める者が後を絶たなかった。幕府軍が外様一藩に敗北したあげく、将軍まで急逝し、いったいこの先どうなるのか。聖堂出の学問師範なら何らかの見通しもあるものと期待されてのことであったが、その内藤でさえ目まぐるしく変転する現状を把握するだけで手いっぱいであり、一寸先は闇であると痛感するばかりであった。

幕府権威の失墜を見せつけるかのように、三条大橋の西詰に掲げられた高札が何者かによって墨で塗りつぶされ、あげくに川に投棄されるという由々しき事件も起きている。高札は江戸の日本橋にもあるが、これは幕府の法令を周知させるために提示されるものであり、すなわち権力の象徴である。遺棄された高札は長州藩を朝敵とする内容だったから、犯行に及んだのは討幕派とみて間違いないだろう。

九月の初旬、この事件の対応に追われている新選組局長の近藤勇が、参謀の伊東甲子太郎と連れ立って内藤七太郎宅へやってきた。近藤はしばしばここへやってきて、内藤と時事を論ずるのを好んだ。

三条制札事件の解決をせかされている近藤は疲労を隠せない顔色であったが、平素のように泰然自若として屈託のない笑顔をみせた。

「これはこれは、大河内殿」

その鋭い目つきと大きな口は、近藤という人物を武骨にみせがちであるが、累代の幕臣とは毛色が違い、庶民的な社交性を多分にもっている。

正道は近藤のことを芯から尊敬しており、常盤之助も常次郎も同じ気持ちだった。幸いにも在京中、何度か近藤と膝を詰めて語らう機会に恵まれ、幕府を補佐する「佐幕」の心情を、一層深めることができた。

座に着くなり近藤が、首筋をさすりながら吐き捨てるように言った。

「またしても高札を抜きとられた。これで二度目です」

それを聞いた内藤は、途端に眉をくもらせた。

「近藤さん、犯人の捕縛を急がねばなりませぬぞ。三度までもやられたら、世間の笑いものになるだけでなく、幕府の威信にもかかわる」

「心配にはおよびません」

とにべもなくこたえたのは近藤ではなく、伊東甲子太郎の方であった。色白く、背筋をすらりと起立して座す様は、さすがに北辰一刀流の使い手と感じさせる。新選組の参謀である。

「三条会所、近辺の酒屋、民家三か所に密偵を配備しています。もう一度やる気なら、袋の鼠ですよ」

事実、三度目の犯行に及んだ討幕派は新選組に急襲され、死者一名、重症者一人を出して逃走した。犯人は土佐藩士八名。京都守護職は新選組の労をねぎらい、報奨金二百両を与えたが、それはまた後日のこと。

火鉢にかけた鉄瓶を取り上げ、危なっかしい手つきで茶を注いでいるのは内藤の中小姓、永峰矯四郎という若者である。甲州の出で、実家は蘭方医であるらしい。「二十歳までに独立せよ」と父に諭され、職を求めて上京してきたという。

近藤は武州多摩、伊東は常陸府中の出身であるから、同じ関東出の正道たちと打ち解けるのに時間はかからなかった。

伊東は湯呑を傾けると、急に何か思い出したらしく、ふっと口角を反り上げた。この男が時おりみせる、皮肉めいた笑みである。

「奇兵隊の大将の、高杉晋作という男ですが、これがどうも、たいそうな馬面なんだそうですよ。馬関の芸者や小僧どもが、それをネタに小唄を囃し立てているんだとか。

こりゃどうじゃ、世は逆になりけり、乗った人より馬が丸顔、とね」

「どんだけ馬面なんけ」と嬌四郎が口を挟むと、その場にどっと笑いが起こった。

正道もひとしきり笑った後、茶を一口すすり、はからずも深いため息をついた。

「我々は今、まさしく、世は逆になりけり、という事態に直面しています。幕府が臣下た

る長州に敗北を喫するなど、あり得ないことであるし、あってはならないことなのです」
「ですが、ものの見事に負けてしまった」と伊東の口ぶりは淡泊だった。
「おっしゃるとおりです。ようやくその事実を受け入れられるようになってきました」
正道の胸中に、失墜した幕府の権威ばかりでなく、亡くなった将軍の無念までもが去来する。
まったく同感、とばかりに、近藤もしばし瞑目した。
それもこれも過ぎたことだと割り切っていたのは常盤之助である。
「近藤先生、我らが木更津で一隊を創立した暁には、東西で呼応し、不埒な奸藩を討ち果たしましょう」
近藤は、この勇ましい発言を好ましく感じたようであり、破顔一笑の表情を見せて、ぽんっと膝を打った。
「この先、西南雄藩が関東に攻め込んでくる事態もあり得ぬとは申し難い。備えておくにこしたことはありませんな」
これを受けて正道が居住まいを正し、近藤、伊東両人に深く頭を下げた。
「我ら、近日中に関東へ戻ります。幕府が再び征長に乗り出すとき、後顧の憂いなきよう房総の固めを急ぐ所存。幕閣の許可を得られ次第、義挙の旗を揚げるつもりです」
伊東は膝に扇子を突き立てて、不敵な笑みを浮かべた。
「今の幕閣はそれどころではありますまい。征長の後始末に追われててんやわんやでしょうから、許可など取らずともよろしかろう。今や各地にて草莽が崛起しており、すでに数えきれないほどの諸隊が作られております。至誠の赴くまま、やるなら即刻やるのみ。時勢はまったなしですよ」
伊東はこのとき、後に新撰組から分派して勤王に転じる自分自身に語りかけたのかもしれなかった。伊東は翌年、隊内の内ゲバで若い命を散らすことになる。
帰郷の途につく前夜、「大河内殿に伺いたきことこれあり」と訪れたのは永峰嬌四郎であった。

「あんたたち、刀は差してるが、身分は武士じゃねえんずら？」
と切り出した嬌四郎の物言いに、腹を立てたのは常次郎である。
「無礼者、こちらは不二心流の師範であらせられるぞ」
「すまんが、お武家さんは黙っててくれ」
嬌四郎は身を乗り出し、細い目をキッと据えて、正道と常盤之助を交互に見つめた。
「おれがあんたたちに聞きてえのは、今度の戦争の敗北で、幕府の命脈が尽きたのかどうか、そのことなんさよ。もし尽きたのであれば、おれは天皇の側につく。そうしなきゃ立身出世できんら。武士の身分じゃねえあんたたちなら、公平な目で時勢を見てるはずだ。そこを見込んで意見を聞きに来た。率直に答えてくれんか」
これだけ世の中が混沌としていれば、身の振り方に悩むのは当然のことであろう。正道は根っからの佐幕派であるが、先行きに対する嬌四郎の不安は察するに余りある。今度の敗戦はまさしく驚天動地の事態であり、徳川創業以来の大失態である。が、
「幕府は、いまだ盤石ですよ」
正道はそう言い切った。
「まず、海軍力が諸藩と比べて圧倒的に勝っている。今度の戦では活用できなかったようだが、四海平定の要は軍艦の数にある。さらに財力を比較してみても、朝廷の実質的石高は十万石程度、これに長州や薩摩の石高を加えても、徳川八百万石には到底及ばない」
「ほれではなぜ負けたのだ」
「勝敗は時の運というでしょう」と切り返した正道も、本当のところはよくわかっていない。しかし、もし幕府が戦術の近代化で後れを取ったのなら、福田八郎右衛門のような優秀な士官によって早期改善がなされるはずである。今度の敗戦を幕閣が猛省した後、御家門、御親藩、譜代大名、さらには旗本八万騎が総力を挙げて反撃に出れば、まず負けることなどあるまい。以上の旨を正道が語り聞かせると、嬌四郎はようやく得心した様子で、
「じゃあおれは、幕府方に付くけ」とうなずいてみせた。
別れに一杯やろうと四人そろって外へ出た。夜もすっかり深け込んでいたが、木屋町界

隈は行灯広告と露店の灯で明るく、軒を並べた旅籠から酒宴のにぎやかな歓声が聞こえてくる。国難のただ中にあろうとも、世間は日常を保っているのだった。

常盤之助は店々の吊下看板を眺めながら、思い出したように大きなため息をついた。

「そういえば、憧れの土方歳三さんには会えずじまいだったなあ」

常次郎も月代を指で掻きながら、

「鬼の副長ね。なんかおっかなくって、こちらから会いに行くのもはばかられましたからね」と無念そうにうなずいた。

「おれは土方と会ったことがあるぜ」嬌四郎が胸を反らせた。

「あれで存外、てーしておっかなくもねえんだ。近藤って人もそうだが、むやみに人を斬ったりする人には見えんのだよなあ。ことに土方ときたら、役者とでもいいてえほど色男然とした風貌だしな」

と、嬌四郎は明治の世になってからも、この話を史談会で語っている。

八劔八幡神社の大神輿巡行にも、三千太郎は姿を見せなかった。

この日ばかりは海漕業者も船乗渡世も仕事を休み、諸肌の入れ墨も鮮やかに、重量一・五トンもある神輿を担いで町中を練り歩くのである。迎え囃子を奏で、先棒と後棒の担ぎ手が向かい合う木更津担ぎは、千貫神輿を自分の肩よりも高く上げ、五十人以上の屈強な男達が入れ替わり立ち代わり肩を入れながら押していく。

今年もまた、不穏な情勢にもかかわらず、それを跳ね返すかのように祭りは行われた。が、力自慢が腕を入れる台座の一隅に島屋の印半纏を羽織った三千太郎の姿はない。誰もが威勢のいい掛け声を上げて神輿の渡御を楽しみながらも、夭折したなをを追悼し、三千太郎の悲しみが一日も早く癒えるようにと祈っている。衣冠姿で奉舁を見守っている八劔勝秀も、勝壽も、こんなに寂しい例大祭は初めてだと思うのだった。

そろそろ暖簾をしまう頃だったが、お店の方はまだ賑やかである。クニの小料理屋は半

分道楽のようなもので、酒もつまみも安くて旨いと評判だった。タコやまぐろのような海鮮類はとれたてだし、漬物は旬のもの、芋の煮ころばしやおでんのにおいを往来にただよわせている。煮込みは出汁を継ぎ足すから味も濃厚で、燗酒とよく合う。クニは酔っても控えめな方であるが、近頃手伝いに来ている豊は、客に勧められるがままにいくらでも飲むから、店じまいの頃はいつも泥酔している。実家に引き籠っている三千太郎のことを案じて様子を見に来るうちに、流し場の仕事を手伝うようになった。クニも豊も、船乗りや港湾人足の荒々しさに動じることはなかったし、むしろ場合によっては怒鳴り散らして追い出すことさえあったから、三千太郎がわざわざ店頭に出て行くような揉め事など起きたためしもない。少なくとも木更津の者なら、島屋門にかかわる場所で羽目を外す者などいるわけもなかった。しかし今宵の客は、いつまでもひっきりなしにしゃべっており、飲み過ぎてろれつのまわらなくなった豊が、

「おっちゃんの話、さっぱりわからん」などと匙を投げるようなことを言っているのだから、めずらしい。

そのおっちゃんの大きな声が、壁越しから嫌でも耳に入ってくる。さすがにしつこい客だと三千太郎も感じた。人前に出るのがおっくうであったが、豊姉でさえ難儀する酔漢とあらば、自分が出て行かざるを得ないだろうと思ったのである。

引き戸を開けてみると、客は一人しかおらず、羽織袴姿の小奇麗な初老の男が、豊を相手に猪口を傾けている。

「いやはや、木更津の酒は、美味くない。玉割りの水がよろしくない。が、水は悪くとも、女はいい。荒々しいが、どこか色っぽい。木更津の水辺、麗人多しかな。やよ、娘よ、そなた花のように美しいぞ」

「あら、ありがと」と答えた豊の目はすでに半開きで、

「あとはミチタにまかせた」

片手を突き出して宣言すると、食台にうっぷして、たちまちいびきをかいてしまった。

初老の男は、天井を振り仰いで瞑目し、

「たいはこまやかに、いはとおくしゅくにして、かつ、しん……」

などと漢詩らしきものを吟誦して帰る様子も見せないから、

「おっちゃん、悪いが店じまいだ」三千太郎が多少すごむような態度で声をかけた。が、

「きりはさいじにして、こつにくはひとし……」

瞑目したまま朗々と続けるのである。

三千太郎の小さな舌打ちを聞き逃さなかったクニが、流しを片付けながら苦笑した。

「もうしばらく、あんたがお相手しておやり。お客さん、ここが気に入ったみたいだから」

身も知らぬ年寄りを相手に面倒なことだと辟易したが、母の頼みであれば仕方ない。

「母さん、おれにも一杯くれるか」床机に腰かけると、

「おい、若者。さきほどからわしの吟じる詩を聞いてなにも感じぬのか」と、さっそくからんでくるのだった。

「すまん。聞いてなかった」

「この詩はナ、女の美しさを詠っておるのじゃ。きりはさいじにして、というところ、曲江で水遊びをする女たちの、肉つき豊かな、艶やかな肌が目に浮かぶようではないか。どうだ、見えたか若者」

と、男は三千太郎の肩を叩くのだった。

「杜甫は詩聖とあがめられておるが、助平な野郎じゃ。なれど、好色こそ命の発露、文芸の源であるぞ。かく申すわしも大いに助平である。ゆえに、天下の大文学者と呼んでさしつかえない。若者よ、わしをあがめよ」とまくしたてて猪口をさしつけた。三千太郎に注げといっている。

クニが湯煎したてのちろりを前に置いた。

しぶしぶ三千太郎が注いでやると、それを一気にあおった。

「いやしくも男子と生れて、どうしてこのまま朽ちてゆけようか。天下を風動し、この名を後の世に残さねばならぬ」

と声を上げた男の目に、きらりとにじんだのは涙であろうか。

「男児志を立て郷関を出ず

学もし成る無くんばまた還らず

骨を埋むること何ぞ墳墓の地を期せん

人間到る処青山あり」

と吟じた後は、はっきりと大粒の涙をこぼした。

三千太郎もクニも、黙って顔を見合わせた。豊のいびきだけが店内に響いた。

男はまた猪口を突き出し、三千太郎は多少圧倒された気持ちでちろりを傾けた。

「長州は強い。それはなぜか。洋式銃を大量に手に入れたからであるか、薩摩と足並みを揃えたからであるか、否。かような詩をものした月性のごとき俊豪の故国であるからじゃ。男児志を立て郷関を出ず、学もし成る無くんばまた還らず。わかるか若者、長州はこの精神を以て挑んだのじゃ。志の在る所、気もまた従う。幕府が長州に負けたのは、この熱き心を忘れたからではないか」

三千太郎は、飲みかけた酒を喉につまらせて、むせた。「幕府が、負けたのか？」

クニも洗い物の手を止めて呆然とした。「湊でそんな噂を耳にしたけれど、風説だとばかり……」

男は口に猪口を付けて一気にあおると、折れ曲がるようにがくんとうなだれてしまった。

「江戸湾随一の大湊とは申しても、しょせん木更津は田舎よ。かくのごとき重大事さえ、未だ民に伝わってもおらぬ。ああ、わしはここで終わるのか。梅田雲浜も頼三樹三郎も清川八郎もすでになく、わしだけが老いぼれて、志をまっとうできておらぬ」

梅田や頼といえば安政の大獄で死刑となった政治犯であり、清川も何年か前に江戸で暗殺された尊王攘夷の頭目だった。かつて世間を騒がせた者たちの名前がいくつも出て来て、さすがに三千太郎も目の前の男がただ者ではないような気がしてきた。

「おっちゃん、あんた何者なんだ」

「失脚堕ち来る、木更津の湊、さ」などと、いちいち漢詩的な言い方をするのがまわりくどい。

どうもこの男の酔い方にはついていけないものがあると思い始めていた頃、店の引き戸ががらりと開いた。

「先生、ここに居られましたか」

と、安堵したように声をかけたのは重城保であった。

「あら、重城さん」とクニの態度が親しげなのは、重城がここの常連だからである。木更津の町に用事のあるときは、必ずここで一杯ひっかけていく。

「クニさん、夜分遅くにすみません」

「おお、重城生も来たるか。おまえさんも一杯付き合いなさい」

「先生、もう遅いですよ。今夜はひとまず旅籠へ帰りましょう」

「かならずすべからく一飲三百杯なるべし、と李白も詠っているではないか、野暮なことを申すな。まさに酒を進めんとす、とどむることなかれ」などと猪口を高く掲げるのであった。

三千太郎は重城に顔を寄せて、

「このおっちゃん、何者なんです？」腹立たしさを隠せない。

「聞こえたぞ、若者。そんなにわしのことを知りたいか。ならば教えてしんぜよう。重城生、教えてあげなさい、天下に名高き、わしの名を」

「この方の名は……」

「嶺田楓江である」と自分で名乗った。

それを聞いて、あっ、とクニが反応した。「ふーこー先生でしたか」

「さよう」と胸を張る様が、いかにも小物そうだと三千太郎は思った。しかしここら辺りではそこそこ知られた人物であるらしい。

クニは炭を継ぎ足すと、燗銅壷にちろりを挿し入れた。湯のたぎる音と、相変わらず豊のいびきが響いている。

重城は勧められるがまま白木の腰掛けに腰を下ろした。

「楓江先生はね、わたしの学問の師なんですよ」

「おまえさんは、わしの自慢の門弟じゃ」

「恐れ入ります。この度は先生に、至徳堂の再興をお願いすべく、わたしがお招きしたのです」

木更津の文化水準の高さを表す指標の一つが、〈至徳堂〉であるといっていい。地元の名主一統の願上により、近隣子弟の教育を目的として開設された学舎である。子供たちの手習い算盤の修学はもちろん、大人たちも農事のかたわら素読稽古に励んだ。運営費は民間有志の拠金を仰ぎ、約半世紀もの間、儒学、漢詩などの講堂教授がなされてきた。が、生徒の減少と昨今の不況のあおりを受けて、この名高き郷学も維持困難となりつつある。

「先生の御学徳を以て、再びこの地に励志学問の気風を起こしたいと願っておりましてな」

「学徳？」

と三千太郎はあきれたように声を上げた。

「学はともかく、徳なんぞ……」この年寄りにはこれっぽっちもありそうにない、と言いたいのだろう。

「聞け、若者！」

トンッと猪口を置くと、楓江はにわかに容儀を正した。

「わしはかつて佐藤一斎に儒学を、箕作阮甫に蘭学を学び、詩は梁川星巌に師事した。あの玉池吟社の大詩人、梁川星巌ぞ。しかも、門下四傑の一人に数えられたほどの詩才であると申せば蛇足であろうか。二十四の時、見聞を広げんがため各地を流浪し、世変の景況を探訪し、ついには最果ての蝦夷地へ渡った。若者よ、蝦夷がどこにあるか存じておるか。北溟に地肌をさらす広大無辺の地ぞ。わしはかの地で北夷の迫りつつあることを知ったのじゃ。於ろしや国は黒船来航以前から辺地を侵しつつあり、文化年間には豊原(樺太)が襲撃されたこともあったという。わしは、北辺の警備と開拓に関する意見書を幕府に提

出し、嘉永二年には清国阿片戦争の惨禍を広く憂国の士に訴えんと『海外新話』を上梓した。これが、幕府の逆鱗に触れた。わしはこの一書により、はからずも日本沿岸の脆弱さを世に知らしめてしまったのよ。畢竟、幕府の不備を批判したも同じであったのじゃ。かくて拙著は没収され、わしは三都居住禁止を命じられて江戸を追われた。そうして流れ着いたのが、この、上総の地であったのじゃ」

三千太郎はアサリの佃煮をつまみながら、黙って聞いていた。

クニが楓江に酒をさしつつ尋ねた。

「確か先生は、吉村平衛門さんのところへ、婿養子に入ったと記憶しているのですが」

「いかにも。わしは失意にうなだれ、この地に骨を埋めようと思っていたのだよ。拙著は開板禁止処分となり、版木も焼かれてしもうた。が、同志たちの手によって、密かに重版されておったのだ！　かの吉田松陰も閲読し、重要箇所を筆写したと伝え聞いておる。なんと喜ばしいことであるか。わしはただ国を憂うのみであり、勤王も佐幕も一切問わぬ。かつて談論風発した綺羅星のごとき志士たちも今やことごとく落命し、わし一人、不遇をかこつ身となってしまった。松陰なぞは防長の神となったのに、わしはこんな片田舎で、郷学の教授でもやるしか能がない」と言ってしまってから、慌てて重城の方へ顔を向けて、

「いや、失礼。心にもないことを申してしまった」とわびた。

「いえ。先生ほどの憂国の志士が、わたしの誘いを受けてくださっただけでも感涙にむせぶ思いです」

「憂国の志士か」と、楓江は遠い目をした。

「その憂国の志士、嶺田右五郎楓江は、迫害を恐れず、死をも厭わぬ。なれど、女房が怖い」と言って、自分で噴き出した。

「わかるか、若者。我が女房は勝ち気でな、若い頃は江戸で旗本のお屋敷奉公をしていたぐらいだから、巴板額のごとき女傑よ。名を、ちよという。金持ちの娘だし、美人だが、前夫と離別した理由は知らぬ。わしはそんなことを詮索するような野暮ではない。なれど

、連れ子の竹次郎は、こう言っては身も蓋もないが、からっきし出来が良くない。わしが婿に入ったのは四十八のときであったと記憶するが、蜜月なぞ始めのうちばかり、惚れた腫れたなんぞ、所詮こんなものであろうよ。わしが読書と詩作に熱中するあまり養家の農事を怠り、田畑も裏山もちよの目をぬすんで売り払ってしまった挙句、それらをすっかり酒代に変えてしまった。酔うて沙場に臥す、君笑うことなかれ。ちよはな、怒り心頭に発すると竹箒を振るってわしを追いかけ回すのじゃ。若者よ、想像してみるがいい。憂国の情止み難く、命をかけて天下に外圧の危急を説き、名だたる名士らと親しく交わって来たこの嶺田楓江が、鬼のごとき形相の女房に追い回されている姿を。これ実に滑稽の極みではないか。先年、故郷の丹後田辺藩牧野候から出動の下命を受け、もっけの幸いとばかりに家を出た。今度の征長戦では軍謀に参じ、戦陣にあること一年余、心を砕いて孫呉の兵法を藩士に教授して参った。乱鎮まって役付になれるかと思いきや、あっさりお役御免とはいささか薄情。まあ、今度の戦において孫呉の兵法なぞからっきし役にも立たなかったのだから、致し方あるまい。折からの重城生の誘いを受けて、なんだかんだとここへ舞い戻って来たというのも、哀れなる我が身の定めであろうか」

瞑目した楓江の猪口に酒をさしつつ、重城は恩師を慰撫するように目を細めた。

「わたしは先生にご教導を賜り、おかげさまで人として立てたと感謝しておりますよ。かつて先生が筆禍事件で江戸を追放され、請西村祥雲寺に塾を開いた頃のお姿が、いまだ目に浮かびます。眉秀にして目もと涼しく、子供ごころにも先生の非凡さに畏怖の念を抱いたものです」

「またまた重城よう」などと、先生はまんざらでもなさそうである。

黙って猪口を傾けている三千太郎の顔を、楓江はふいにのぞき込んだ。

「若者よ、そなた名をなんと申す」

ふっ、と三千太郎は苦笑した。

「やっと他人に興味を持ったか」

「なんと申した」

「その前に、おっちゃんは何でそんな変な号を名乗ってるんだ。ふーこーなんて、ずいぶん奇抜だけど」

「そこがわしの詩人たる所以よ。わしの生まれは田辺藩江戸藩邸、この傍らを流れていた楓川という川の名をとったのじゃ。なんとも粋な、良い号であろう」

「さっきからおっちゃんの話を聞いていて、少し不思議に思ったことがある。おっちゃんはなんで、そんなに有名になりたいんだ？」

「なにを……」わかり切ったことを、と言いたげに楓江は両目を見開いた。

「そなたは頼山陽の詩を知らぬのか。安ぞ古人に類して、千載青史に列するを得ん。山陽がこれを詠んだのは十三歳の時ぞ。生きているうちに昔の優れた人物たちに負けない働きをして、永く歴史に自分の名を残したい。男子たるもの、この心情を知らぬ者なぞおらぬはずじゃ」

三千太郎は首を傾げた。クニがそれとなく流し場からその様子を見つめている。

しばし沈黙の後、三千太郎は手ずから酌をし、冷めた燗酒をすすった。

「剣の世界では、敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取られると教わる。おっちゃんが有名になれんのは、有名になろうなろうと思い詰めているからじゃないか。心を一方に置かなければ、十方へ広がる。もっと楽な気持になれば、おっちゃんの能力も生かされる気がする」

しばし楓江は目をしばたたかせていたが、やがて呵々大笑した。

「生意気なことを申すものよ。まだ若いのに、禅坊主のようなことをぬかしおる」

「おれはこれといって何の能もないが、剣禅一如についてなら、少しばかりわかる気がするんだ。剣だけは子供の頃からやってきたから」

「何の能もない？　馬鹿な、おまえさんはなかなかのものよ。してそなた、名を何と申す」

「みちたろう。三千世界の三千に、太郎と書く。姓は大河内」

「おおこうち？　大河内とな……」

何か心当たりでもあるものか、楓江は腕を組んで考え込んだ。
「もしや、そなた、大河内一郎殿の御子息か」
「おっちゃん、父さんのことを知ってるのか」
「知らぬわけがあるまい。大河内一郎といえば、関八州にその名をとどろかせた剣士ぞ。武芸ばかりでなく、文にもすぐれ、才気煥発、眼中に異彩あり、人に長たる威厳を持った大人物であった」
三千太郎とクニは目を合わせた。たちまちクニが涙ぐみ、手拭いをまぶたに押し当てているのを見て、楓江はあっと声を上げた。
「女将は一郎殿の御内儀であったか」
「いえいえ、囲い者にすぎませぬ」涙を拭きながら笑った。
「世の常として、男は正妻よりも妾の方を好む」
「おっちゃん、いや、楓江先生、もっと父さんの話を聞かせてくれないか」
「一郎殿を知る者なら、誰しも同じことを言ったものよ。もし彼が乱世に生を得ておれば、三軍を叱咤する英雄となったであろう、とな。火事で焼けた木更津をここまで復興させたのも、一郎殿の威徳の賜物ではないか。今以て、早世が惜しまれてならぬ」
一郎の話題となった途端、にわかに色めき立った店の雰囲気を察したものか、「んごっ」といびきをつまらせた豊が、むっくり顔を上げた。
「なんだい、盛り上がってるね」
「やあ起きたか、麗しき乙女よ」楓江は大喜びである。
「一郎殿もそうであったが、大河内の者は彫が深く、実に端麗なる面立ちをしておるなあ」
と近づいてくる楓江の顔を、豊が容赦なく押し返した。そんな扱われ方もまんざらではないようであり、楓江はすっかりご機嫌な様子で、今度は三千太郎の方へ顔を振り向けた。
「三千太郎、そなたあっぱれなる美丈夫であるが、好いた女子はおらぬのか。さぞや浮名

を流しておるのだろう」などと口走ると、急に店が静まり返ってしまったから、楓江は赤みをおびた目をきょろきょろさせた。

重城が言いにくそうに何か言いかけると、

「重城生、言わんでいい」それを強くさえぎった。

「大方、なにか悲しい話でもあるのだろう。そんな話、わしは聞かんぞ。どうせ狭い田舎のことじゃ、そのうち嫌でも耳に入る。わしは、この楽しき酒宴に、一片の悲しみさえ持ち込みとうない。わしは、わしの悲しみだけで手いっぱいなんじゃ。このうえ誰かの悲しみに触れようものなら、我が心は、秋雨のごとき涙に濡れそぼつであろう」

「おっちゃん、なんでそんなに、悲しいの」と豊が聞いた。

「芳山を望まんと欲すれば、路さらにはるかなり。そんな悲しみを、人は誰しも抱いておるのだよ。肝の太そうなこの重城生も、凛とした女将も、そして麗しの乙女、そなたもな」

「そうなのよ。なんだか知らんけども、悲しいのよ。おっちゃん、もう一杯やるべ」

酒宴は結局、朝まで続いたようである。

幕府が長州藩に敗北したという事実は幕臣らを落胆させた。けれども、次期将軍は神君家康公の再来ともいわれた一橋慶喜様であろうというのが大方の予測であり、それならばきっと禍は転じ、むしろ事態は好転するに相違ないという期待を抱かせてもいる。慶喜は幼少より英明の誉れ高く、世継ぎのない十三代将軍家定の後継者と目されていたが、大老井伊直弼のごり押しにより十四代は御三家紀州の家茂が継いだ。その家茂が大阪で薨去した今、十五代は慶喜をおいて他にない。が、さすがの慶喜もこの難局における就任をためらったようであり、徳川宗家を相続した後も、五カ月ちかく将軍宣下を受けなかった。

幕末の思想といえば「尊王攘夷」が知られるが、もう一つ、歴史的に重要な思潮がある。ペリー来航時に老中であった阿部正弘が、当時国是を決めかねて、諸大名、旗本、庶民を問わず広く意見を募ったことがあり、それ以降、「公議・公論」という思想が芽生えつ

つあった。従来のように国の舵取りを幕閣に一任するのではなく、朝廷、外様、その陪臣らも政治に参加させることで、多数の意見を議論して国の方向性を決めて行こうとする考え方である。慶応二年頃から幕府の崩壊に至るまで、徳川慶喜や坂本龍馬などの進歩的知識人層が、この考えに基づく新たな政治体制を模索していた。これこそが現状の最も平和的な解決方法となるはずだし、日本を中央集権統一国家へ変革していくという発想にも繋がる。

フランス公使レオン・ロッシュなどは大胆にも、

「中央集権郡県制度を実施すべき」などと慶喜に献策している。

薩長を武力で圧伏し、封建制を廃して諸藩を郡県という行政単位に解消して、軍事、外交、財務、司法などを幕府が一括して掌握せよ、と勧めたのである。しかしそこまで露骨なやり方をせずとも、公議公論を尊重して三百諸藩の連合を形成し、徳川がその統率者となれば同じこととはいえまいか、と賢い慶喜は思いをめぐらせている。いずれにせよ、これを実現させるためには諸藩を圧倒する強大な軍事力を背景とせねばならない。海軍はようやくその規模に達しつつあるが、陸軍に関してはいまだ軍隊の体を整えるまでに至っていない。

近代戦の主役は銃を持った歩兵である。この、

「歩兵」

という単位が、武士の耳にはどうしても、

「雑兵」と聞こえてしまうのである。

これが幕府陸軍の形成を難しくしている要因であった。

正規兵たる幕臣が、なかなか銃を持ちたがらないのだ。武士といえば甲冑に身を包み、馬上名乗りを上げて先陣を切るというお定まりの姿が、もはや時代にそぐわないことを受け入れられずにいるのである。

たとえば三百石の知行取りなら、軍役規定で十人の家来を召し抱えていることになっている。幕府はこの武家奉公人を供出させることで歩兵を作ろうと試みた。しかし、思った

ほど人数が集まらなかったのは、実際に家来を召し抱えている幕臣が少なかったためである。ちなみに下級武士の給料の単位である「〇〇俵〇人扶持」の「扶持」は、家来に支給する飯米として与えられるものであるが、実際に扶持の数だけ用人を召し抱えている家などほとんどなく、それはいわば給料に付随する「手当」のようなものになっていた。仕方なく直轄領や知行地から農家の次男三男などをかき集めたり、人納できない旗本には金納を課すなどして人員と軍費をまかなったのであるが、意外にも、このにわか仕込みの歩兵たちが征長戦において刀槍の武士よりも善戦したのである。そんな皮肉ともいえる結果を教訓として、戦後は一般庶民にも募兵をかけることになった。

江戸という都市は参勤交代によって栄えたといっても過言ではない。藩主に随行してきた膨大な地方武士たちの単身赴任生活を支えるべく、多くの産業が成り立っていたからである。しかし幕末となり、諸藩の財政難をかんがみて参勤制度が緩和されると、たちまち町に失業者があふれた。歩兵の募集はその受け皿ともなったが、素行の悪い者も多く、統制するのにはなはだ手こずっている。にわか仕込みの士卒であるから、既存の武士のように重代の厚恩もなく、単なる雇用関係でしかない。募兵に応じた者の中には、犯罪歴をもつ者や、やくざ崩れなども多かった。

徳川宗家を相続した一橋慶喜は、すぐさま兵制改革に取り組み、有無を言わさず幕臣の銃隊化を断行している。大まかに分類すれば、旗本上士は奥詰銃隊と遊撃隊、下士は撒兵隊という名の部隊に編成された。ここに至って幕府陸軍の体裁がようやく整うのであるが、当の幕府の命脈自体がそろそろ尽きようとしている。が、慶応二年下半期の段階で、誰がそんな運命を予測できただろう。幕府を敵に回した薩長でさえ、時代がそれほど急転直下に変転するとは予想だにしなかったはずである。

この年の八月、砲術奥詰に配属された堀岩五郎にしてもそうだった。

征長戦の敗因は、主力であった芸州藩の裏切りによるものであって、幕府軍勝利の可能性は充分あったと信じている。が、この戦争の直後、幕府が海外から輸入した四万挺にも

およぶ鉄砲の劣悪さに暗澹たる思いを抱いているのも事実であった。
「銃砲輸入の担当者が、よく調べもせずに買い付けたのだろう」
と堀は深刻な面持ちで、ためしに持ってきた一挺を皆に示した。
「時代遅れの先込め式だし、銃器の至る所が錆びついていて使い物にならぬ。こんなものを売り付ける西洋夷のいいカモにされたのだ」
さらに堀は憤懣やるかたない様子で言った。
「近頃は、農民や町人出の歩卒までも士分気取りで、己のことを〈拙者〉などと言っておる始末だ」
神田小川町にある陸軍所の一室に、福田八郎右衛門を上座にして複数の侍が集っている。当時そのような呼び方はなかったけれども、彼らは新設陸軍の〈青年将校〉ともいうべき存在であった。密かに会合を重ね、徳川幕府の本来あるべき姿を模索している。堀岩太郎、斎藤閑斎、戸田嘉十郎、真野鉉吉など、名門旗本の若き惣領が顔をそろえていた。
この日は、都から戻ったばかりの正道、常盤之助、常次郎も同座に連なっている。
「もちろん」と堀は念を押した。
「大河内殿は別格にござる。それがしが申したいのは、昨今の風紀の乱れなんじゃ。金目当てで集まった歩卒など、幕府の戦力とはなり得ぬだろう」
錆びついた銃身をためつすがめつ眺めていた斎藤閑斎は、ふうと深いため息をついて、それを膝元に置いた。
「我々の先祖は、武勇青史に赫々たる三河武士ぞ。なんぞ累代の功臣たる我らが、府下無頼の徒と同列の銃卒などになれよう。しかも、このような汚き銃を携えて戦場に臨めようか」
斎藤常次郎の叔父であり、齢がしらの閑斎でさえ憤懣やるかたない気持ちを隠せずにいる。座の一同も、そうだそうだと怒りの声を上げた。
福田は、いつものように柔和な笑みをたたえて皆を制した。その布袋様のごとき福相は、殺気立った場の空気を一瞬で鎮めてしまう不思議な魅力に満ちている。これこそが一軍

の将たる者の資質に他ならず、正道が福田に全幅の信頼を寄せる根拠もそこにあった。福田は言う。

「来年早々にも、小栗上野介殿が招来したフランス軍事顧問団が参る。我らは将軍の直臣のみで調練を致そう。馬丁や陸尺出の傭格とは、はっきり一線を画すのじゃ。銃も最新式のものを揃えよう」

閑斎は納得したように二度うなずき、ぱちんと音をたてて扇子の折り目をたたんだ。

福田と閑斎は髪を二つ折の大銀杏に結っていたが、他の若い士官たちは月代の幅が狭く、髷を直線にした「講武所風」にしている。これは、講武所(陸軍所の前身)へ通う侍たちが流行らせた髪型で、当世武家エリートの雰囲気を醸し出す装いであった。

そんな青年たちの中に身を置いて、やや恐縮していた常盤之助だったが、どうしても気になる点がある。そのことについて、周りをはばかりつつも、一膝すすめて福田に尋ねた。

「今や銃器の性能と数、それを扱う兵の練度が勝敗を決する鍵なのかもしれませんが、そうだとすると刀は、もはや役に立たないものなのでしょうか」

これは正道にとっても切実な懸念であった。

福田は手を膝にして、相変わらず穏やかな表情を崩さない。

「西欧の兵書によれば、野戦は必ず弾丸二、三発の間に勝負あり、とあります。兵器の主流が銃砲となっても、最終的な勝敗は斬り込みで決するということです。したがって、洋式軍制を導入しようとも、武士の魂は揺るぎない」

武士の魂とは、刀のことである。

ついでながら、勤王の志士には尚古主義者が多く、一時は佩刀も古制の太刀造りが流行ったものであった。しかし、いざ実戦に用いてみると長尺の刀は扱いづらく、流行は一気に終息する。その後は二尺(約六十センチ)程度の刀が主流となり、これは〈突兵拵〉と呼ばれた。一般に刃の長さが一尺以上二尺までを脇差と定義するから、打刀が定寸ぎりぎりまで短くなったわけである。戦場で人を斬るのに最適な長さが追求された結果であり、

戦争は否応なく人を現実主義者にする。

ところが、幕末という乱世にあって、なかなか現実に目覚めなかった一群がいる。それが何を隠そう「幕臣」なのである。打ち続いた太平の世は、当時の国家公務員たる旗本や御家人らの生活感覚や現状認識能力をいちじるしく低下させていたのかもしれない。福田たちが密かに会合を重ねて秘密結社のようなグループを形成していたのも、後に登場する江原素六が明治になってから証言しているように、「当時幕臣の多くは、其の位に在らざれば其の政を謀らずてふ泰平因襲の余習によりて、国家のことを談論するものあれば注意人物として擯斥せられ」る危険性があったためだ。幕府の崩壊後、陸軍内の各部隊がそれぞれ独自の軍事行動を起こしたのも、福田らのような小勢力がてんでに形成されるにとどまり、士官らの間に統一的な大義名分や戦略が確立されなかったためであろう。

注意人物として擯斥せられるとは、言い方をかえれば、出る杭は打たれるということでもある。それゆえ重職の者と面会するときなどは、悪い噂が立たぬよう細心の注意を払う必要があった。下士官の仙石釟三郎が静かに引き戸を開けて入室してくるなり、福田の耳元に顔を寄せて「小栗上野介殿が御来着されました」と小声でささやいたのも、壁に耳ありを警戒する配慮からであった。

「さあ、参りましょうか」

福田は正道一人を伴って部屋を出た。

陸軍所の長い広縁を足早に進み、左右の様子をうかがいながら控えの間を開くと、現海軍奉行の小栗上野介忠順が、若党も連れず一人で座していた。

「おお、八郎右衛門、息災であったか」

安政七年、通商条約の批准書交換のため米艦ポーハタン号で太平洋を横断した日本人の中に、この小栗がいた。幕閣の中でも当代一の実力者で、外国奉行、勘定奉行、江戸南町奉行、初代歩兵奉行、軍艦奉行などの要職を歴任し、横須賀製鉄所(造船所)の建設、横浜フランス語学校の開校なども手掛けてきた。日本の近代化の基礎を築いた政治家として

、後世「明治の父」と呼ばれることもある。

福地源一郎(元幕臣、明治のジャーナリスト)の評によれば、小栗という人物は「精悍敏捷にして多智多弁、加うるに俗吏を罵嘲して閣老参政に及べるがゆえに、満廷の人に忌まれ」、七十回ほども役職の降格、罷免を受けたというからただ者ではない。「またも小栗様のお役替え」と江戸城の坊主衆に揶揄されたほどであったらしい。しかし、実務能力においてこの男の右に出る者がいなかったから、何度罷免されても難局の現場に復帰する。その結果がそうそうたる経歴となったわけである。

先祖は三河以来の直臣であり、家康から「また一番槍」という感嘆を込めて「又一」という名を賜ったほどの勇士であった。当主は代々この名を受け継ぎ、二千五百石を世襲する旗本屈指の名門である。左文右武の家に育った忠順もまた弓術と砲術の名手であり、将軍の武芸上覧で褒美を賜ったこともあるほどの腕前だった。しかし、八の字に生えた眉毛と、ややたれ目であるせいか、「多智多弁、加うるに俗吏を罵嘲」というような気性は実際に話してみないとわからないほど、見た目は温厚そうである。

房総有志隊創立の件は、すでに福田から聞き及んでいる。小栗はさっそくその話題に触れた。

「大河内殿、有志隊発足にあたって、幕府の承認は受けぬほうがよろしかろう。また、軍用金の方もそれほど多額の援助はできかねぬことを始めに申しておく」

というそっけない切り出しに、正道は胸を締め付けられるような気分になった。

小栗は愛想笑いの一つも浮かべずに、話しを続ける。

「現在、慶喜公が強力に推し進めている軍事改革の要諦は、指揮系統の整備、並びに組織の一元化である。故にこのたびは旗本自前の組合銃隊も、天領農民で組織した御料兵も、すべて陸軍所へ編入される。あの八王子千人同心でさえ、八王子千人隊と改称されて編入されるのじゃ。もし大河内殿が、御自身の心情で独自の活動を展開されたいのであれば、当面は幕府陸軍とは別個の道を歩まれた方が良いかもしれぬ。また、陸海軍共に兵器の近代化にかかる費用が甚大で、フランスからの借款さえ検討している有様。率直に申して、

金がない」

と少し笑ってみせたのは、勘定奉行を務めたこともある小栗の自嘲でもあったろうか。幕府の財政窮乏は危険水位を越えつつあり、全旗本二百九十万石の俸禄を向う十年の間、半分に減らして軍費に充当する必要があるとも語った。さらにはフランス公使ロッシュが提案しているという「中央集権郡県制度」の説明まですると、小栗は居住まいを正して、正道と福田を交互に見つめた。

「いっそのこと、房総(現在の千葉県域)を我が国初の〈県〉にしてしまってはどうか」

と、突然突拍子もないことを言い出した。小栗はさらに続ける。

「俸禄を半分にするなら、これは実質、半知令となる。ならばいっそ俸禄自体をやめて、旗本も御家人も県の職員にしてしまえばよい。まずは房総が県となれば、天領と知行地の多い武州や甲州はもちろん、御親藩、譜代大名、徳川家連枝の藩もそれに続くであろう。昨今どの家中も進退を決めかねておるから、尊王でも佐幕でもない、この第三の選択は歓迎されるのではあるまいか。県の代表を招集して議会を開けば、徳川は郡県制度下における最大勢力となり、慶喜公を議長に推すこともできよう。さすれば王政の世に復したとて、権力は徳川の掌中に残る」

福田などは仏語が堪能で外国の知識もあったから、この手の話は初耳ではないが、正道にとっては度肝を抜く内容だった。小栗は正道の動揺を見て取り、さらに膝を詰めて語った。

「木更津は年貢米や物資の集散地であり、江戸湾交通の要として幕府のお膝元と直結しておる。木更津湊を押さえ、そこを本営とすれば房総半島の統治はたやすかろう。今後、幕閣は本気で封建制を廃するはずじゃ。世界の列強ことごとく郡県制であれば、我が国もそれに習わねばなるまい。慶喜公が将軍となり次第、必ずや行動を起こされようから、そのアカツキには、堂々と三つ葉葵の定紋を打ち出し、そなたらの手により房総を取り纏めてもらいたい」

これを聞いて正道は、しびれるような恍惚感と、若干の不安を交えた高揚感を覚えた。

まさか、これほど壮大な企てに加担するなど想像もしていなかったからである。京で出会った伊東甲子太郎の「至誠の赴くまま、やるなら即刻やるのみ。時勢はまったなしですよ」という言葉が喫緊のものとして思い出される。正道はこみ上げてくる感涙を飲み込んで、

「上野介様、我ら島屋一門は、身命を賭して、幕府と進退を共にします」平に伏した。

福田も高い声で、

「それがしも、一点の私意をさしはさまず、神明に誓って、徳川幕府に忠誠を尽くします」とかしこまって平伏した。

幕末も差し迫り、この頃から小栗上野介忠順を盟主と仰ぐ人脈が密かに形成されようとしている。この、「佐幕右派」ともいうべき一群が、やがて幕閣に台頭する勝海舟と対立するのである。

境内から張り出した枝の葉が、赤や黄に色づき始めていた。

木更津にある寺院の多くは、その名の通り寺町通り沿いに立ち並んでおり、御朱印帳を手にした参拝客らが行き交っている。そろそろ往来に肌寒い塵風の吹く頃となっていたが、浴衣がけに懐手をして、素足に下駄をつっかけて歩いて来るのは三千太郎である。時おりよろける様は、したたかに酔っているようであった。

真言宗豊山派、愛染院の門をくぐって少し進むと、左手に庫裡、正面に本堂、右側の墓地のすぐ手前に大河内家の墓所がある。三基ある墓石の真ん中に、栄樹院直心妙了信女となった、なをが眠っている。

ここに来ようと思って来ているのではなく、気が付いたらここに来ているのである。三千太郎はなをの墓前に座り込み、ぽつねんと石のおもてを眺めるのだった。するとそこに、いろんな表情のなをが、次々と浮かんでは消えていく。なをの元気な声も、記憶の奥から聞こえてくる。

浴衣の帯から下げた小さな赤い巾着袋を手に取ると、三千太郎は中身の何粒かを掌に乗

せた。出産前、ねんねこ茶の子を作るためになをと炒った、あの一握りの豆であった。

「まめでぇ、健康にぃ、育ちます、ように～」

桜の花降る縁側で、そんな小唄をたわむれに歌っていたなをの横顔を思い出すたびに、三千太郎の口元はふっと緩む。が、次の瞬間には、目や胸の奥から熱いものが込み上げてくるのだった。いつになったらこの感情が薄れてくれるのか、毎日毎日、愛別離苦に身もだえ、前後不覚になるまで酒をくらい、茶の子の豆を眺めては、誠この世に、神も仏もおらぬのかと呪い続けている。

なをの墓石の横に、一郎の墓も立っている。ああ、父さん、楓江先生は父さんのことを英雄の器量であったと賞賛していた。それなのにおれは、なをの死から立ち直れず、日増しになをが恋しい！

いつしか陽も西に傾き、鴉の鳴き声が山の方へ遠のいていく。誰かがこちらに近付いてくる気配を感じたが、三千太郎は墓の前に座り込んだまま、振り向く気力さえ失っているようだった。

「三千太郎さん」

聞き慣れたその声は、なをの姉、すまである。

「またここにいたんですね」

と、いつもは三千太郎の横にしゃがみ込むのだが、この日は立ったままで、傍らに誰かを伴っていた。

茶縮緬の打裂羽織に大小を帯びている姿は侍に違いない。手甲を着けた手で菅笠の紐を解くと、三千太郎に向かって一礼した。

「請西藩士、諏訪数馬と申す」

三千太郎は酔って朦朧としていたが、なをとべか舟に乗ったとき、請西藩に従兄がいると話していたことをすぐに思い出した。

立ち上がって場所を開けると、数馬は本差のみ腰から抜いてすまに手渡し、再び三千太郎に一礼して、静かに跪座合掌した。

夕日に染まったうろこ雲が、ずっと遠くまで続いている。連れ飛ぶ雀が東の空へ帰ってゆく。

「わしより先になをが逝くとは、想像もしておらんかった……」

そうつぶやいた後、数馬は肺から絞り出すような咳ばらいを何度かした。

その咳の感じといい、蒼白した顔色といい、労咳を患っているのかもしれない。咳が止まるまで、すまが屈んで背中をさすった。

数馬の佩刀は朱漆の拵で、美的感覚の鋭い地曳家の面目躍如たるものがあるが、労咳の吐血を連想させないでもない。数馬は藩主に従って在京していたため、婚儀にも葬式にも立ち会えなかったことを深く詫びた。持病がいよいよ重く、このたびは療養のために帰省を余儀なくされたと三千太郎に語った。

「拙者は十四も年上ですから、なをやすまのことはねんねこの頃から知っています。おむつだって替えたことがある」

すまは照れ臭そうに笑って数馬の肩を軽く叩いた。

彼の父幸右衛門は、地曳家から諏訪家へ養子に入り、林忠英、忠旭の二代に仕えたが、若くして亡くなっている。祖父の諏訪頼母は国元の陣代を務めたこともあり、数馬も現当主忠交の近侍であった。勤番になる前は、互いの家が近いのもあって、地曳姉妹のことを妹のように可愛がっていた。

「なをは、暇さえあれば料理をするか本を読むかしているような子だったから、まさか出会ってすぐの相手と結婚するなんて、ほんにあの時は寝耳に水でしたよ」と、数馬は三千太郎の顔を仰ぎ見て深くうなずいてみせた。「あなたに一目惚れしたのでしょうな」

するとすまも皮肉っぽい笑顔をみせた。

「ほんと、男になんか全然興味ない子だったのにね」

三千太郎はすましたような面持ちでうなずきながら、着崩れた上前の衿を調えた。内心、なをに愛されていたことを身内の口から聞けて嬉しかった。

もう、とっぷり日が暮れて、仏灯を蔵した本堂が明るくたたずんでいる。

「母の店に行きませんか」

往来の方へ顔を向けて三千太郎が言った。

「数馬さん、いってらっしゃいよ。あたしは船宿の仕事があるから戻らなきゃいけないけど。クニさんとこの料理はすごく美味しいよ、あたしのとは違ってね」

近しい者ならすまの料理下手は周知のことだから、数馬は軽く咳き込みながら、思わず噴き出してしまった。

クニの小料理屋の格子から、相変わらず食欲をそそる煮込みの湯気が立ちのぼっている。暖簾をくぐって引き戸を開けると、長床几に片足を乗せた楓江先生が、豊を相手に陶然と酔いしれていた。この時代、外が明るいうちに夕餉を済ませる者が多かったから、すでにお客はまばらであった。

三千太郎が数馬のことを紹介すると、クニも豊もしばし感慨深げにその姿を眺めて、どうぞどうぞと奥の腰掛へ差し招いた。

「確かに」とうなずいた豊は、数馬の顔をじっと見つめて深いため息をつく。「目と鼻になをの面影があるよ。やっぱり親戚だねえ」

朱鞘の佩刀を預かった三千太郎が奥の間にそれをおきにいくと、楓江が徳利を掲げた手をぶらぶらさせながら数馬の横にやってきて、どかりと腰を下ろした。

「請西は一万石の小藩とは申せ、献兎賜盃を許された名門中の名門。藩士にとって、丸の内三頭左巴に下一文字の家紋は、大いなる誇りであろう」

などと、いつものように博学ぶりを披歴すると、数馬は「はい」と真顔でうなずき、打沈んだ様子で目をしばたたかせた。

突如ガッと片手で自分の顔を覆い、もう一方の手を食台についてよろめきかけた体を支えながら、肩を震わせて泣き出してしまった。

これにはさすがの楓江先生も度肝を抜かれ、首を傾げて三千太郎の方へ顔を向けた。

数馬は嗚咽の下で「申し訳ござらぬ」と声を絞り出し、懐から取り出した手拭いを目頭

に押し当てて、水洟をすすり上げる。

「それがし、幼少より近習を相勤め、伏見奉行を仰せ仕った藩侯に随従しておりましたが、多事多端のこの時期に、折悪しく持病なんぞをこじらせ帰郷することと相成り、まこと面目ない次第です。先日、江戸の藩邸に立ち寄りましたところ、先代の御子息昌之助様より、今はゆるりと休養し、後日の働きに備えよと、懇なお言葉をかけていただき申した。昌之助様は嘉永元年のお生まれですから、拙者より十三もお若いのです。それがし、深く感じ入るとともに、この若君の菩薩のごとき大恩に、どう報いればよいか、それがしがごときに、何の働きができようかと考えて、胸を痛めております」

ここまで言うと、数馬は店の三和土に膝を付き、しばし苦し気に咳き込みながら両の手を付いた。

「せめてそれがし、一朝事あらば、主君の御馬先で討死せんと欲す。しかれども生来蒲柳の質で、学で身を立てよと祖父に訓育され、恥ずかしながら尚武の気風とは縁遠く、弓馬槍剣の嗜みさえおぼつきませぬ。このような軟弱者にござれども、三千太郎殿、どうかそれがしに、せめて表芸だけでも稽古を付けてくださらぬか。伏してお願い申し上げる」と地に額を押し付けるように頭を下げた。

武士が土下座するなど前代未聞であったから、三千太郎も慌てて対面に平伏したが、楓江先生はパシッと扇子で膝を打ち、

「そなたの心意気、誠あっぱれである。三千太郎よ、指南しておやりなさい。見上げたものではないか」と感涙にむせぶと、

「盛年重ね来たらず、一日再びあしたなり難し」と詠じ、

「何をもってか憂ひを解かむ、ただ杜康有るのみ。クニさん、酒じゃ！」と叫んだ。

ちろりを手にして燗酒を注ぎあい、まずは一献というところで数馬がふいに立ち上がり、皆をゆっくりと見回しながら、

「おなを、そなたの家族は、今もそなたと共にあるぞ」

そう虚空に向かって声をかけ、猪口を捧げて献杯した。

三千太郎は、率直に胸を打たれた。生前のなをに話しかけるように、数馬がその名を呼んだからである。まるでこの場になをがいるようであった。いつだってなをがそばにいると、三千太郎はそう思うようにしている。しかしなをは一度として目に見えるかたちで現れたこともなく、仮寝の夢にも立ってくれない。やはり死んでそれっきりなのかもしれないと諦めにも似た気持ちになることもたびたびある。そんなとき、三千太郎の心は搾め木にかけられたような悲しみを覚えるのだ。けれども、今宵は確かに、なをの魂をすぐそばに感じている。

クニは数馬の体調を気遣い、密かにちろりの酒を水で薄めた。

楓江は一口すすると、憮然とした面持ちで口を鳴らし、

「木更津の酒は美味くない。玉割りの水がよろしくない」と、いつもの不平をもらすのだった。

磨き抜かれた道場の床は、そこに立つだけで三千太郎の心を剣士に戻す。

いつもより呼吸がゆったりと深くなり、仙骨がぐっと内に入って重心も安定する。肩の力がぬけて、三千太郎はひさしぶりに心が軽くなるような気がした。

豊が口元に袖を当てて縫之進に耳打ちした。

「あんなに落ち着いたミチタの顔、ひさしぶりに見た」

「そりゃあね、くさっても剣士ですよ」

刻み煙草を丸めだした縫之進の手を、豊が叩いた。

「ここをどこだと思ってんの、神聖なる道場だよ、罰が当たるって」

「おれは神聖なる甕場で毎日吸ってるが、罰なんぞ当たったためしがない」

しぶしぶキセルを腰差しの煙草入れに戻した。

遅れてやってきた茂三郎が、二人の間に割って入った。

「ああ、竹刀を持ったミチタのなんと凛々しいこと。ミチタはああでなくっちゃなあ。いよッ、島屋！」などと声を上げたから、豊に「しー」とたしなめられた。

なをの死後、一度も道場に出て来なかった三千太郎の姿を一目見ようと、コンモたちばかりでなく、門弟たちも詰め掛けている。ざわざわとしたどよめきが、さきほどの豊の「しー」で静寂に包まれた。

これまで役方(文官)として生きてきた数馬は、防具を手にしただけで身の引き締まる思いがする。緊張した面持ちで竹腹巻を着けている数馬に、くだけた調子で勝壽が話しかけた。

「なにも武芸は剣だけではないですよ。今の時代、鉄砲だって馬鹿にできない」

それを聞いて首を傾げたのは三千太郎だった。

「鉄砲？　稲富流炮術のことか」

「いやいや、おれが習ってるのはそんな大したもんじゃない」

「おまえ、鉄砲を習っているのか」

「まあな、これが意外と面白くってなあ」

二人のやり取りを聞いていた数馬は、さすがに江戸で役方を勤めてきただけあって、時勢に鋭い。

「勝壽殿、昨今銃器の操作法を知らざれば戦にならぬと聞き及びますれば、ぜひとも後日、砲術の指南を賜りたい」

勝壽は快くうなずいて、数馬の防具の装着を手伝った。

面鉄をかぶり、竹刀を手にした数馬に向かって、三千太郎は静かに言った。

「姿勢も心もまっすぐに保ってください」

それを聞いて豊は、ふいに目頭が熱くなった。懐手をした縫之進も、きっと同じ思いだったに違いない。コンモはそれを口に出さずにはおれない性質である。

「ミチタが道場に帰って来たぜえ！」

壁板を背にして並み立つ門弟から拍手喝采が起こったが、豊の「しー」で再び静寂に戻った。

「さあ、打ってきてください」

三千太郎に促された数馬は、力いっぱい振りかぶり、「えいッ」と気合一閃竹刀を振り下ろしたが、三千太郎はそれを軽く受け流した。

「肩の力に頼ってはだめです。肚で打ち込むのです」

数馬は深くうなずくと、まなじりを決して再び打ち込んだ。

打っては払われ、払われては打ち込み、また構え直して打ち込む。そのたびに玉のような汗が散った。

「剣術は、気、剣、体の練り合いです。肚で打つ。数馬さんは股下の脚で打っている。それでは戦場で斬られます！」

やがて数馬は疲労でよろけた。勝壽が駆け寄って休むように勧めたが、首を横に振って竹刀を構え直し、やああッと声を上げて打ち込んだ。三千太郎は容赦なく、その打ちを振り払った。

秋晴れの涼やかな朝、お重に太巻きや漬物、煮しめをたんまりと詰めて、島屋の裏木戸を出たのは豊、三千太郎、縫之進、勝壽、数馬である。コンモは残念そうに髷を撫でつけながら往来まで出て見送った。

「おれも一緒に行きてえんだが、店を留守にもできんからなあ」

豊は八重桜の模様が入った被布を纏い、縫之進は尾上菊五郎が流行らせた長合羽、勝壽は相変わらず馬の尻尾のように長い総髪に直垂姿で、三千太郎と数馬のみ地味な羽織袴の装いである。この旅芸人のような一行が海岸通りの旅籠に寄って楓江先生を叩き起こし、紅葉狩りにでも行くようなノリで小糸へ向かった。

「謝儀が高いんだけども、それは勘弁してくれな」と勝壽はあらためて皆の了承を求めた。「なにせ、金にうるさい師匠でね」

酒壷を傾けて直飲みしていた楓江は、朝から上機嫌である。

「洋式鉄砲の操練といえば徳丸ヶ原で行われたものが有名じゃが、それを上総くんだりで実見できるとは果報なことよ。カツの師匠は高島秋帆の門下か？」

「いや、西洋鉄砲とか、そういったものじゃなくて……」
「ならば、和流砲術かえ」
「まあ、ようするに、ふつーの鉄砲」
「なれど名うての炮術師なのじゃろう。稲富流，西村流，井上流，一火流、流派もいろいろあるからのう。会って教えを乞うのが楽しみじゃ。これからの世は、鉄砲よ」
すでに酔いが回って足元のおぼつかない楓江の腕を、三千太郎が支えて歩いた。一行は房総丘陵の奥へ奥へと入っていく。
「ししみせ」と書かれた幟が見えてきた。以前来た葦簀張りの茶屋である。
店にはすでに酒樽が用意され、しし鍋がぐつぐつと煮え立っている。勝壽が払うであろう謝儀を当て込んで勝手に用意されたものに違いない。
相変わらず汚いつづれを着、股引に脚絆を着けた七右衛門が縁台にどっかり腰掛けて、丼鉢になみなみと注いだ酒を飲んでいる。
楓江は店内を見回して、しばし目をしばたたかせていたが、やがて七右衛門のことを頭のてっぺんから足先までじろじろと眺めて、睨むように勝壽を見返した。
「まさか、この者が、師匠とか申すのではあるまいな！」
「師匠です」
「はあああ？」
その場にへたり込みかけた楓江の体を支えながら、数馬が耳元でささやいた。
「貌を以って人を取る、という格言もありますれば、まずはお手並みを拝見致しましょう」
諭された楓江は、しかし不服そうに唸りながら茶屋の板壁に立てかけられた鉄砲へ目を向けた。
「火縄銃ではないか。今どき、旧式と申しても、せめて、せめて、ゲベール銃ぞ。そもそもおぬしは何流の炮術師なのだ」
丼鉢の酒を飲み下すと、七右衛門は大きなゲップをした。「何流？　そーたもの知んね

え。おれは代々の猟人だ」

勝壽が不敵な笑みを浮かべて鉄砲を指差した。

「先生、まずは一度、腕前を披露してください」

のっそりと巨体を揺すって立ち上がった七右衛門に、楓江はきんきんと裏返った声で不平を述べ立てる。

「今や銃といえば滑腔式から施錠式へ、前装式から後装式へ進化しつつあるのだぞ」

「なんの話だ。言ってるごどがさっぱりわがんねえ」と言いながら、七右衛門は店の外へ出て、銃口に火薬と紙片を詰め込み、胴乱からごそごそと六斤玉を取り出した。

「今どき、そのような円弾は時代遅れと申しておるのだ。西洋の最新式の銃ともなれば、銃腔面に螺旋状の溝が刻まれておって、円錐形の鉛弾が回転しながら射出される。これにより弾速が上がり、射程距離が延び、命中度が飛躍的に向上するのである」

楓江の講釈をよそに、七右衛門は竹の皮を結った縄に火を着けている。

「まだ火縄とは、情けない。種子島から一歩も出ぬではないか。せめてその部分だけでも雷管式であってほしかった」

銃底を地面に立て、左手に巻いた火縄を火縄挟みに挟み込んでからの七右衛門の動作は早かった。膝台の構えで銃を水平に持つと、銃口を上に向け、右手で火蓋を切り、引金を引く。

パーン。と耳をつんざく音が山林の奥まで響いた。それと同時に小さな野鳥が一羽、空から落ちてきた。

皆、ゆらゆらと降ってくる羽毛を茫然と眺めていたが、やがて豊が、

「すごい、一発必中だ」と声を上げた。

七右衛門は銃を杖にしてのっそりと立ち上がった。

半ば口を開いたまま上を眺めていた楓江も我に返り、

「こ、この白い煙は、黒色火薬ですかなあ」などと腰をくねらせながら愛想笑いを浮かべたが、七右衛門はそれに答えず、

「鉄砲にはそれぞれ癖がある。その癖見極めなぐぢゃ当だんねえ」

と言って耳の穴をほじった。

いやはや！　と高らかに笑った縫之進が目を輝かせて、

「先生、おれにも撃ち方を教えてください」と身を乗り出すと、三千太郎も数馬も七右衛門を取り囲むようにして銃身やカルカを手に取って眺めた。

パーン。

パーン。

静かな山林に銃声が響いた。そのたびに歓声が上がり、はしゃぐような笑い声に包まれる。

それを聞きながら豊は、持参した重箱を縁台に広げた。しし鍋をかきまわしている茶屋の店主に声をかけた。

「おっちゃんもこっち来て一緒に食べるべ」

「ああ、どうもな。いま茶沸がすからな」と店主が土間へ向かうと、続けて楓江も声をかけた。「わしには酒を」

パーン。

パーン。

豊はゆったりと番茶をすすりながら、銃を取り合ってはしゃぐ三千太郎たちを眺めていた。

「あんなに楽しそうにしているミチタ、ひさしぶりに見た」

楓江は注がれた酒を一口舐めて、ほほう、と感嘆した。「ここの玉割りの水は、実に美味いのう」

「あたしも、昼間から飲んじゃおうかな」

「おお、飲むがいい。ご主人、猪口を、も一つ」

楓江は天を仰ぐように首をそらして一飲みした。

「乙女よ」と神妙な面持ちになる。

「そなた、好いてもいない男に嫁がされ、早々に別れたそうじゃな」
「やだ、もうそんなこと知ってるんだ」
「木更津なぞ、たいして広い町でもないさ。うわさ話がすぐ耳に届く」
「嫌だねえ、肩身が狭いよ」
「三千太郎は」と声を落として、楓江は手酌で注いだ酒をすすった。
「最愛の女を、一夜にして亡くしたと聞く。しかもその腹には、まだ見ぬ我が子が宿されていたと」
パーン。
三千太郎が撃った銃の火皿から白い硝煙が上がった。弾道を確かめるように身を乗り出し、山林の奥へ目を凝らしている。
今度は数馬が銃を手に取った。銃口をのぞき込みながら咳き込んでいる。
楓江は遠い目をして、「あの労咳は、かなり進行しておる。長くはあるまいよ」と声をひそめた。
豊は猪口を傾けつつ、黙って皆を見つめていた。
パーン。
さすがに若い彼らは飲み込みが早く、射撃手順は習得したようであり、次弾の装填をいかに早く済ますかを競い始めている。
早撃ちの手際を教える七右衛門も熱が入り、ときどき茶屋に戻って丼鉢の酒を飲み干すと、また皆のところへのしのしと駆け戻るのだった。そんな七右衛門は暑くもないのに汗をだらだらかいているから、縫之進が藍染の手拭いを細くたたんで鉢巻きにするよう差し出した。シミ一つない木綿布を手にした七右衛門は躊躇したが、縫之進に勧められるがまま頭に巻き付けた。
「七先生ェ、鉢巻きをすると、キリッとするねえ。ああ、実にいい男だよ」
「からがうな」と仏頂面であるが、少しだけ口元がほころんでいる。
圧倒的に手先が器用なのは縫之進であった。火薬と弾丸を詰めた木筒(早合)を銃口に

入れると、銃床で地面を叩き、素早く銃身を水平に構える。

パーン。

パーン。

「そろそろおれにも撃たせてくれ」勝壽がしびれを切らせて声を上げた。

そんなやり取りを遠目に見ながら、豊はくすくすと笑った。そしてゆっくり味わうように猪口を傾けると、「はあ」と深いため息をもらした。

「ずっとこんなふうに、安穏としていたいものだねえ」

「乙女よ、そなたはまさしく今が旬。人生これからではないか」

「人生かあ。ふーこー先生、人生って何なの」

「ああ、それをわしに聞いてはならぬ。その問いは禁じ手ぞ」

「へえ、意外。先生って、そんなことばっかり考えていると思ってた」

「人生というものは、考えるものではない」

「そうなんだ。あたしは考えちゃうなぁ。悲しいことがあるたびに考えちゃうよ。なをは若くして逝っちゃって、残されたミチタは眠れないほど苦しんでいる。数馬さんはあんなにやる気があるのに持病に苦しめられてて……。神様とか、仏様とか、なんでそんないじわるをするのかねえ。人間なんて、哀れなものだよねえ」

豊が徳利の底に残っていた酒を注いでくると、楓江は猪口を傾けて一息に飲み干した。

「それでも人は、生きてゆく」

パーン。

パーン。

秋晴れの空の下、赤や黄に色づいた山林の奥まで、銃を撃つ音が響き渡った。